ソメイヨシノ ・・・

１０・１１号棟南の芝生広場を彩るソメイヨシノは光ヶ丘団地内でも屈指の桜名所でしょう。

そのソメイヨシノは、江戸末期から明治初期に、江戸の染井村（現在の東京都豊島区駒込）に集落を作っていた造園師や植木職人達によって育成されました。

当初は「吉野桜」の名で売り出したのですが、後に奈良の吉野山のヤマザクラと混同しやすいので、明治33年に「日本園芸雑誌」において「染井吉野」という名前に改められました。

長い間その起源については不明なことが多かったのですが、２００７年の報道によれば、遺伝子解析によりオオシマザクラと、コマツオトメのようなエドヒガン系栽培品種（コマツオトメと断定されてはいません）の交配で生まれたものであることが分かってきました。花が大きいオオシマザクラと、葉が混ざらず花が先に咲くエドヒガンのいいとこ取りというわけです。

オオシマザクラ

コマツオトメ

もともと桜には、カンヒザクラ、シダレザクラなど、およそ４００種類以上あると言われていますが、今や、桜といえばソメイヨシノと言うまでになりました。その理由として２つのことが考えられます。

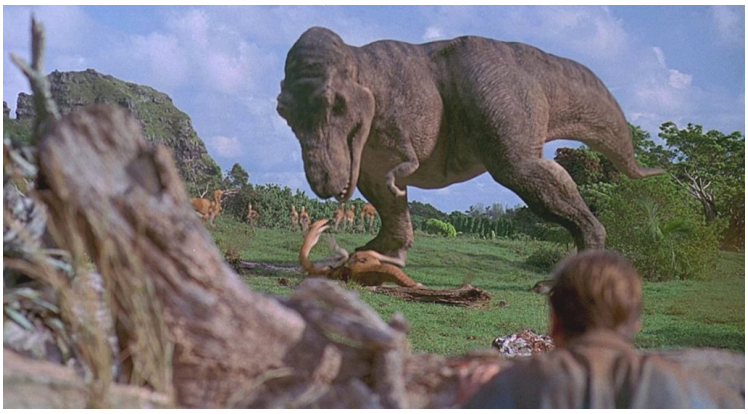
まずは、誰もが納得するその美しさと気品でしょう。花は３、４個集まって咲き、香りはなく、花弁は５枚の一重咲きと、清楚の極みです。しかも、緑の若葉が出る前に、木全体を覆うように淡紅白色の花を一斉に咲かせるとともに、その散り際も潔いものがあります。

もう１つの理由は、クローン植物であるということです。クローンにありがちなことですが、ソメイヨシノも不稔性のために種子ができません。そのために、自力で繁殖することができません。

では、どうやって増えているのかと言えば、人の手による「接ぎ木」という、別の桜の木の上にソメイヨシノの枝をくっつけて育てる方法がとられています。つまり、日本中のソメイヨシノは、全てが１本の木からコピーされたものであるということになります。

クローン植物であるがゆえに、遺伝子が同じですので条件が整えば一斉に開花することになります。言い換えれば、世界でも類を見ない、全国津々浦々に配した生物気象観測レーダーとも言えるでしょう。

そして、明らかに地球温暖化の影響でしょうね。年々開花時期は早まり、恐らくあと十数年もしないうちに入学式に満開の桜という風景は見ることができなくなるのではないでしょうか。何とも寂しい限りです。



最後に、少し蛇足になります。

映画「ジュラシック・パーク」に、恐竜が自力で繁殖し始めるという逸話が出てきますが、ソメイヨシノにも徐々にこの傾向が現れているようです。つまり、繁殖力をもつ、別の野生桜の花粉で結実し、その根元に交雑した種子が芽吹くことがまま見られるようになってきているそうです。

こうしたことに、どこか不気味さや危うさを感じるのは私だけでしょうか。